

# 三川町方言の将来 —方言意識から探る—

田部 奈央子

## 1. はじめに

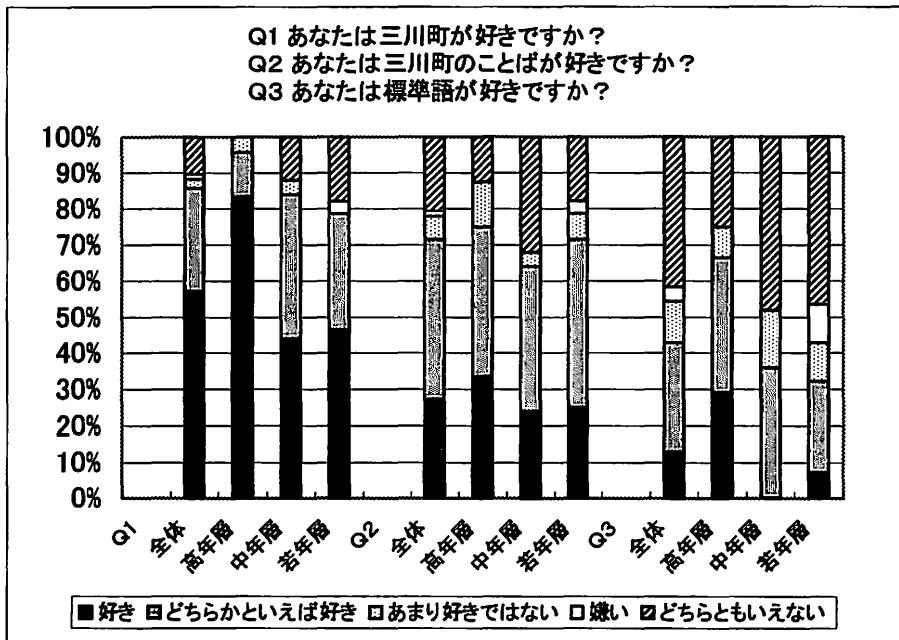
言葉は変容しつつある。ならば方言も確実に変容しているはずである。今回の調査をもとに、三川町の方言はどのような方向に変化しつつあるのか、またその変化の裏にはどのような話し手の言語意識があるのかを探っていききたい。

調査はアンケートの形式で行った。ご協力くださったのは現在三川町に住む若年層(18～34歳)28名、中年層(35～59歳)25名、高年層(60歳～)24名、計77名の方々である。

## 2. 三川町の好感度・方言と標準語の好感度

今回のアンケート項目の「あなたは三川町が好きですか?」「あなたは三川町のことばが好きですか?」および「あなたは標準語(共通語)が好きですか?」という質問の回答を図1に示した。

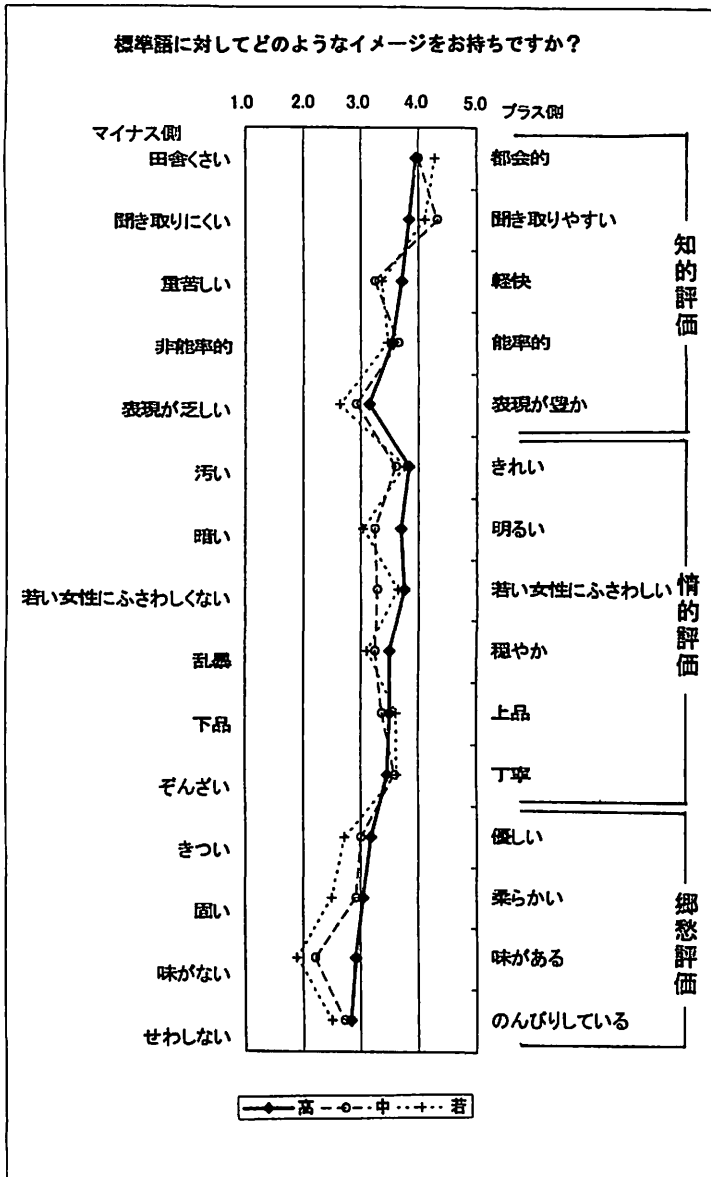
図1



「あなたは三川町が好きですか？」については、全体の80%以上の人々が「好き」「どちらかといえば好き」と答えている。世代別に見ると年齢が上がるにつれてその割合は増加している。「好き」という回答は高年齢層において非常に多く見られ、他の年齢層では半数を下回っている。これは、長年住んできた土地への愛着からかと考えられる。

「あなたは三川町のことが好きですか？」についても70%以上の人々が「好き」「どちらかといえば好き」と答えており、好感度が高いことがうかがえる。しかし、積極的に「好き」と答える人の割合は「三川町が好きですか？」の約半分ほどになっている。

図2



最後は「あなたは標準語が好きですか？」であるが、予想通りというか、三川町のことばに関する好感度と比べると、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた人の割合は少なくなっている。しかしここで注目すべきは、その内訳において、より標準語に慣れ親しんでいるだろうと考えられる中・若年層の割合が低く、高年層が群を抜いて割合が高いことである。標準語に関するイメージ調査でも、高年層が情的・郷愁評価において他年層よりもプラスの評価をしているという結果が出ている(図 2)<sup>※</sup>。この結果について考えられる理由の一つは、他の項目や、面接調査において聞かれた「三川のことばには敬語がない」という意見である。つまり、高年層では敬語のある標準語を丁寧な良いことばと感じる人が多いのに対し、若年層では敬語をよそよそしい感じのことばとして積極的に「好き」と言えない人が多いのではないかと考えられる。もう一つは、若い世代は標準語に慣れ親しみすぎていて、標準語を評価の対象として見られなくなっている、ということが考えられる。

### 3. 標準語意識と使い分け

標準語に関する好感度は上で見たとおりだが、次にその使用に関する質問項目の結果を見ていきたい。

まず、図 3-1、2 に示したのは、「あなたは標準語をうまく話す自信がありますか?」「(標準語をうまく話す自信が「あまりない」「全くない」ことについて)どう思いますか?」という質問の回答である。面白いことに、標準語が「好き」と答えた人の一番多かった高年層において、標準語をうまく話す自信が「ある」「少しならある」と答える割合が一番低かった。うまく話す自信の「ない」ことに対する意識については、中年層において「恥ずかしい」「残念だ」「仕方がない」といったマイナスの意識がめだった。次いで高年層・若年層の順にマイナス意識を持つ割合は減り、若年層ではほとんどが「別に何とも思わない」と答えていた。若年層では自信が「ない」と答えた人は少数派だったのに、それでもコンプレックスをあまり感じていないという面白い結果がでた。これは、中年層が一番他の地域の人と接する機会が多く、そのためにコンプレックスを持つ人が多くなっているからではないだろうか。この意識は、図 1 で見たように三川町のことばが「好き」「どちらかといえば好き」と答える人の割合が低かったことにも少なからず関係しているだろう。

図3-1

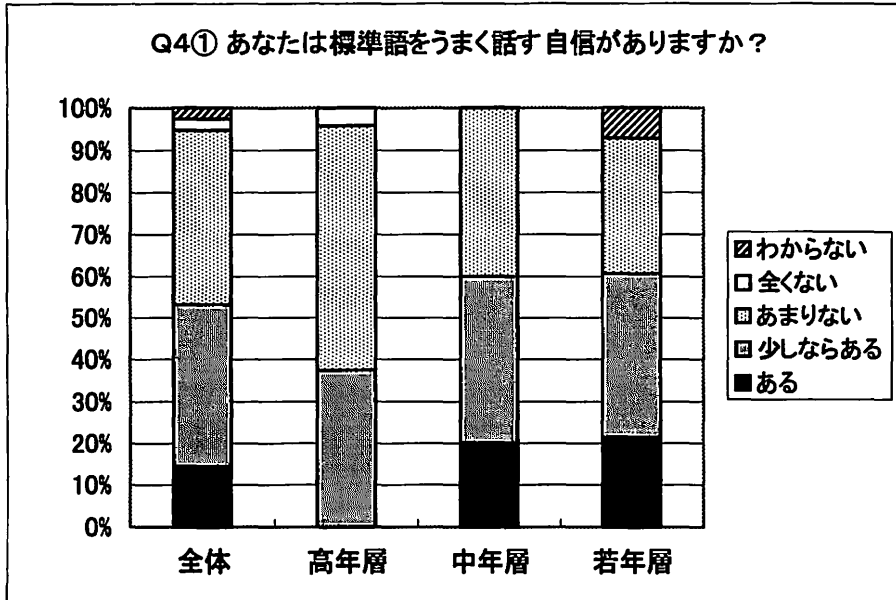
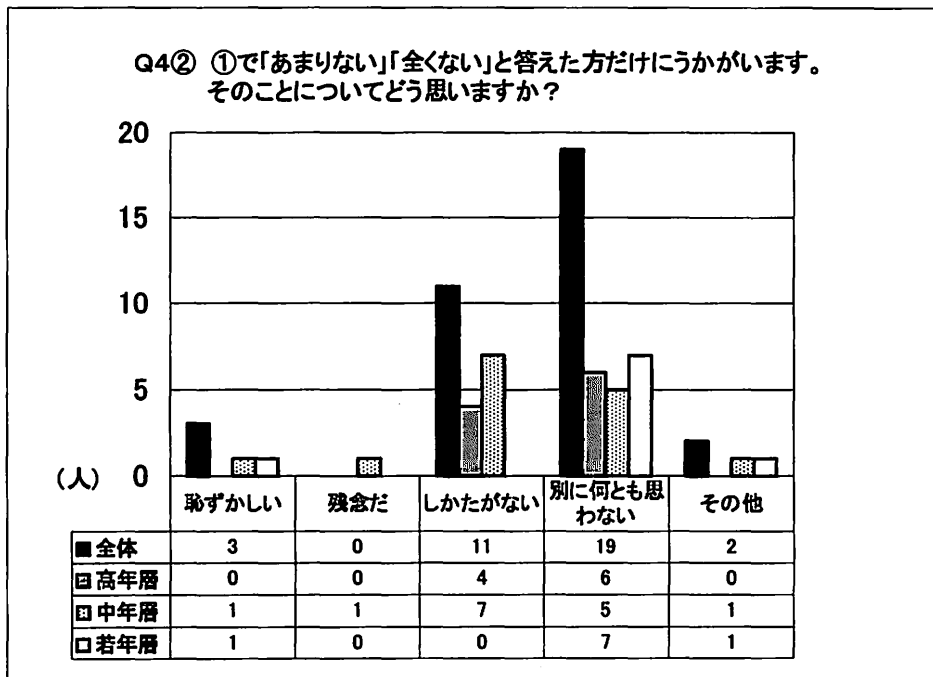


図3-2



次に、「三川町のことばと標準語を使い分けることについてどのように感じますか？」という項目の結果を図4に示した。全体として、「不自然だ」「屈辱的だ」「わずらわしい」「使い分ける必要はない」等の、使い分けを否定する意見は少なく、「当然だ」「仕方がない」「何とも思わない」等の、使い分けを必然であるとする意見が多かった。これは上でも述べたが、三川町のことばは常体のことばであり、話者たちには「標準語＝敬語」という意識があり、それゆえに使い分けを当然と考えている可能性が高いといえる。

図4

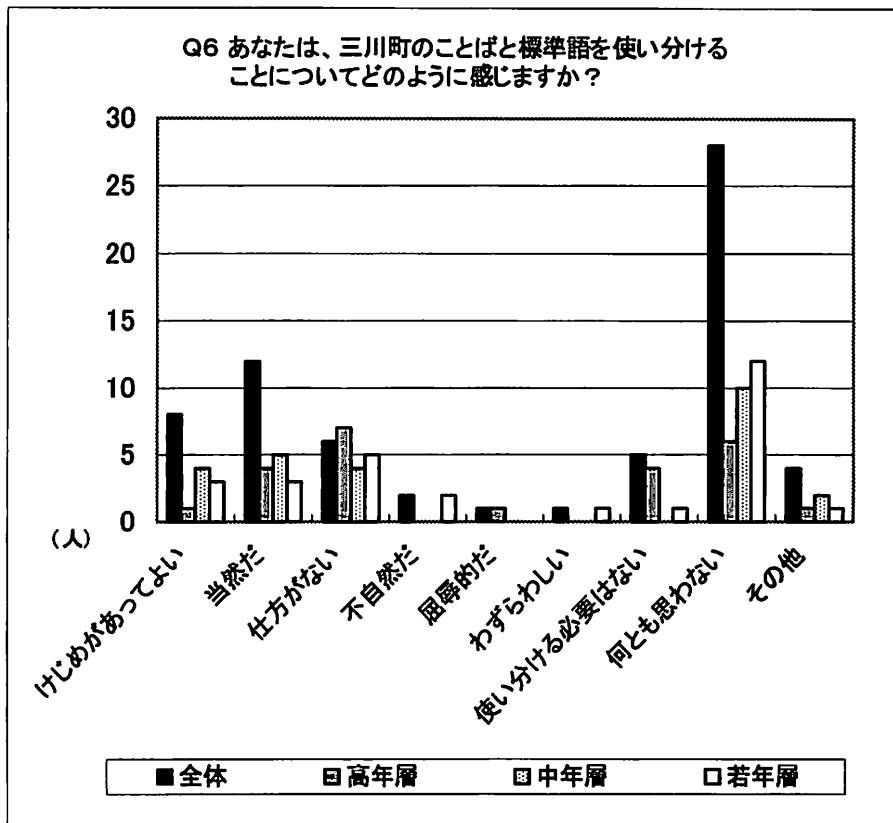
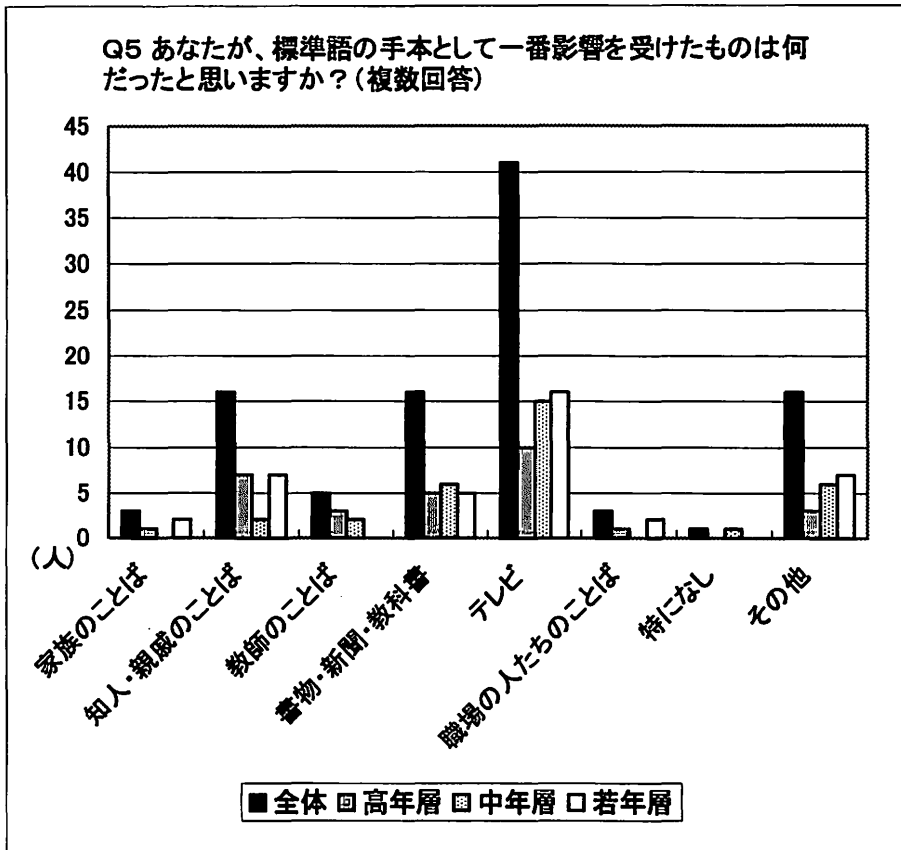


図5は「あなたが、標準語の手本として一番影響を受けたものは何だったと思いますか？」という項目の結果を示したものである。どの年層においても「テレビ」の影響を多分に受けていることがわかるが、やはり年代が下がるほど増加している。全体としてはその次に「知人・親戚のことば」「書物・新聞・教科書」「その他」が続くが、年層によって順位は異なる。「その他」には「(大学時代等に)県外に住んでいた時の友人のことば」や、「ラジオ」等があった。

図5

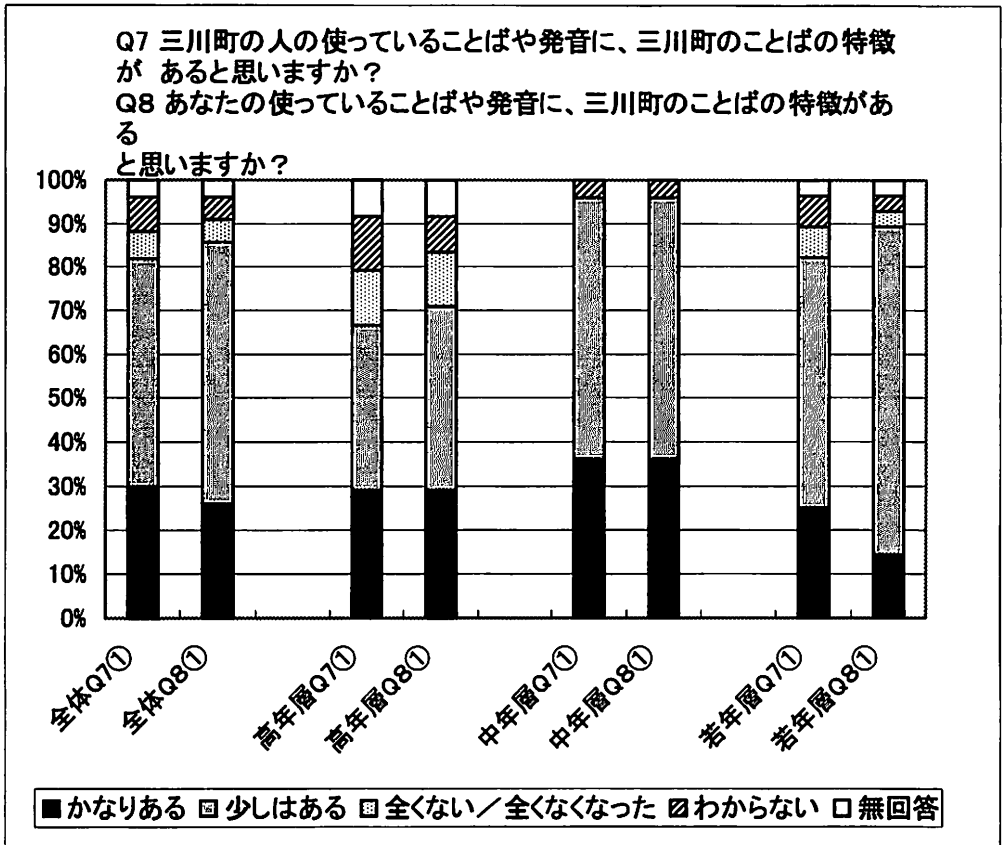


#### 4. 隠れた方言コンプレックス

「三川町の人／あなたの使っていることばや発音に、三川町のことばの特徴があると思いますか？」という項目の結果を図6-1に示した。ここでまず驚いたのは、高年層の「ある」「少しはある」という回答が他の年層より少なく、「全くない／全くなかった」という回答が多かったことである。高年層で「全くない／全くなかった」と答えた人は実数にするとQ7、Q8ともに25人中3人とそう大きな数字ではないが、

中年層では0人、若年層においても1～2人という結果をみると、何か意識の差がありそうである。高年層において、「自分のことばに三川町のことばの特徴が全くなかった」と答えた3人は、Q4の「あなたは標準語をうまく話す自信がありますか?」という項目で「あまりない」と答えているところを見ると、質問の意図を「三川町に特有のことばの特徴があるか?」と勘違いしたのではないかと考えられる。実際「三川町に特有のことばの特徴があるかわからない」というコメントを書いてくれた方もあった。一方、中・若年層でこのようなコメントが見られなかったことの原因は、87年から開催されている「方言大会」の効果によって「三川町方言」の特徴やイメージが統一されてきたことではないかと考えられる。

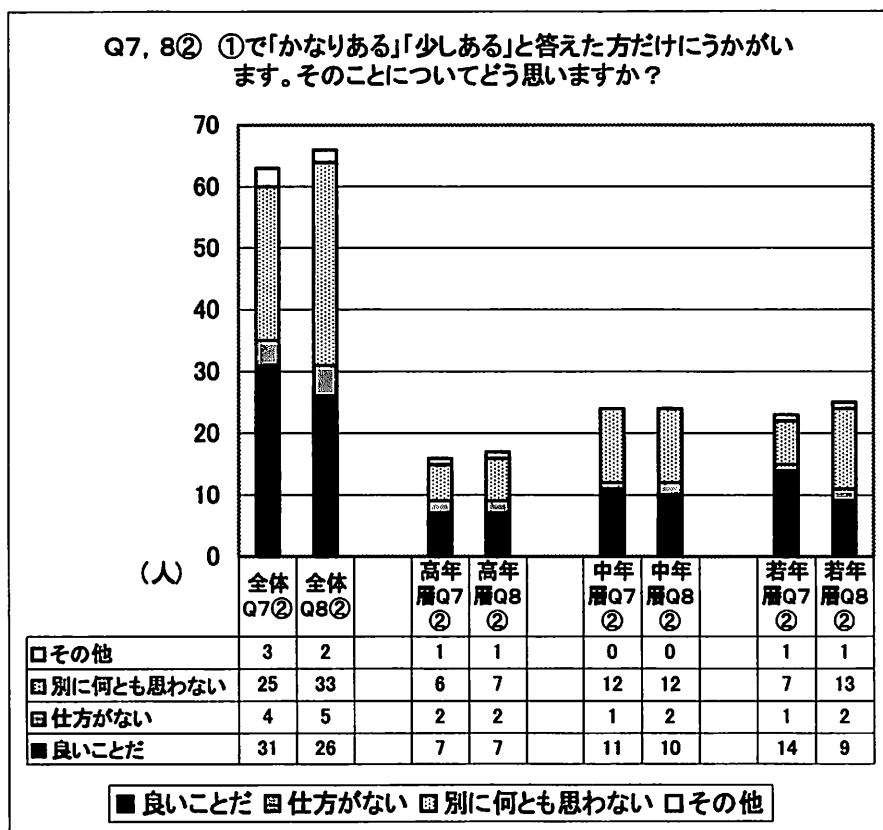
図6-1



筆者はこの質問で、三川町住人の隠れた方言コンプレックスについて探ろうと思った。少しでも方言を恥じる気持ちがあれば、Q7とQ8の回答に差がでるのではないかと考えたのである。結果は、図6-1、2を見ればわかるとおり、高・中年層ではほ

とんど差はみられず、そういった気持ちは抱いていないことがわかった。若年層の中には、「三川町の人を使っていることばや発音に、三川町のことばの特徴がある」ことに関しては「良いことだ」としながらも、「あなた（自分）の使っていることばや発音に、三川町のことばの特徴がある」ことに関しては「別に何とも思わない」と回答する人が4人ほど見られた。3節での「若年層は（自分が標準語をうまく話せないことに対して）あまりコンプレックスを感じていないようだ」という分析をふまえると、これだけでは、若年層は自分の方言に「コンプレックスを持っている」とは断言できないが、少なくとも中・高年層より、方言を誇りに思う気持ちが弱いといえるのではないだろうか。その他、図6-2の選択肢には「残念だ」もあったのだが、回答した人はいなかったなので図からは省いた。

図6-2





次にもう一つ方言コンプレックスに関する質問をしてみた。「①あなたは三川町のことばを使って笑われたことがありますか?」「②(あると答えた人は、)そのときどのように感じましたか?」という項目である。ここではもうすこしはっきりした年層差が現れた。まず、①で「ある」と答えた割合が、年齢が下がるにつれて増加している(図7-1)。さらに、「ある」と答えた人でそのときに「恥ずかしかった」「腹が立った」のように不愉快に感じた人数も年齢が下がるにつれて増加している(図7-2)。ここから、若い人の方が方言コンプレックスを持ちやすい状況にあることがわかった。ちなみに、その他の回答は「新鮮だった」「自分では気付かなかったのでおもしろかった」「意味を教えてやった」(若年層)、「話題の一つになるのでありがたかった」(中年層)という肯定的なものばかりであった。

図7-1

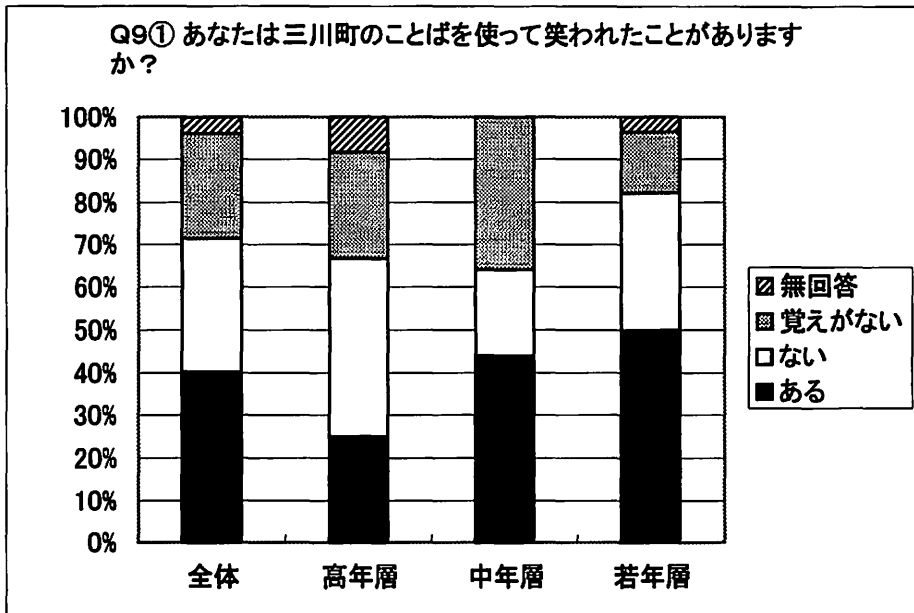
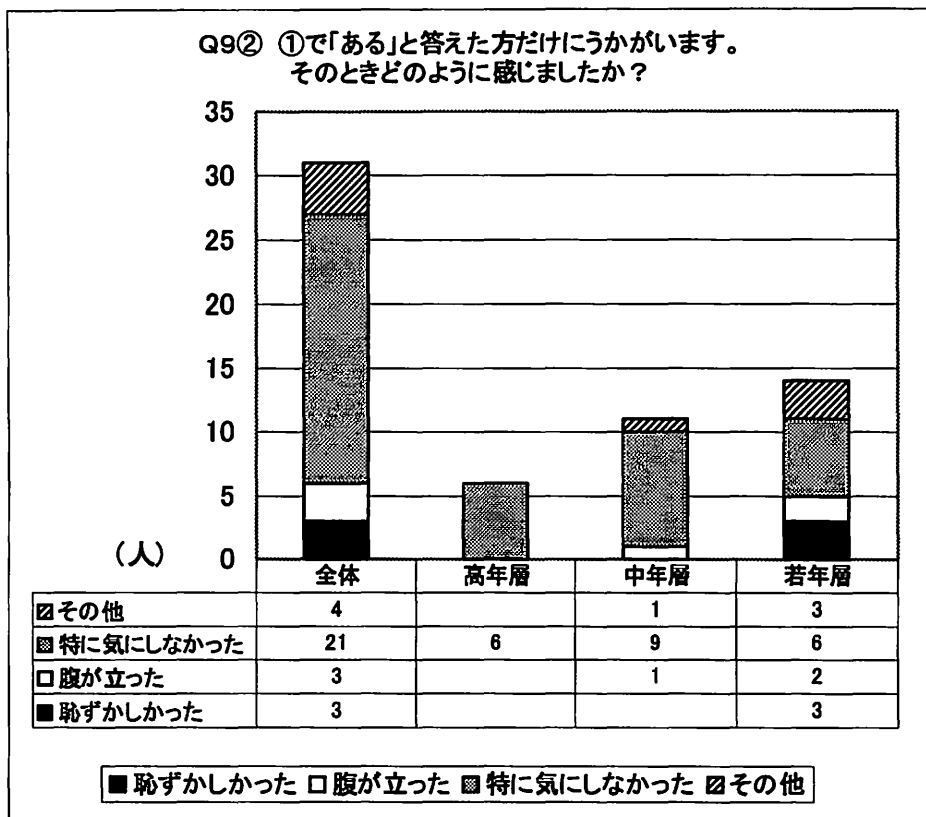


図7-2



## 5.三川町方言と変化

では、三川町のことばは今後どうなっていくだろうか。

「三川町のことばを後世に残しておきたいと思いませんか？」(図8)という項目に関しては、約半数の人が「残しておきたい」と答えている。年齢別に見ると、年齢が上がるにつれてその割合は10%くらいずつ増加している。次いで「どちらでもよい」という回答が多くなっている。少なくとも意識の上では変化を避けようとしているようである。その傾向は、次の「自分の子供や孫にはどんなことばを使って欲しいと考えていますか？」(図9)の回答においてもみられる。

図8

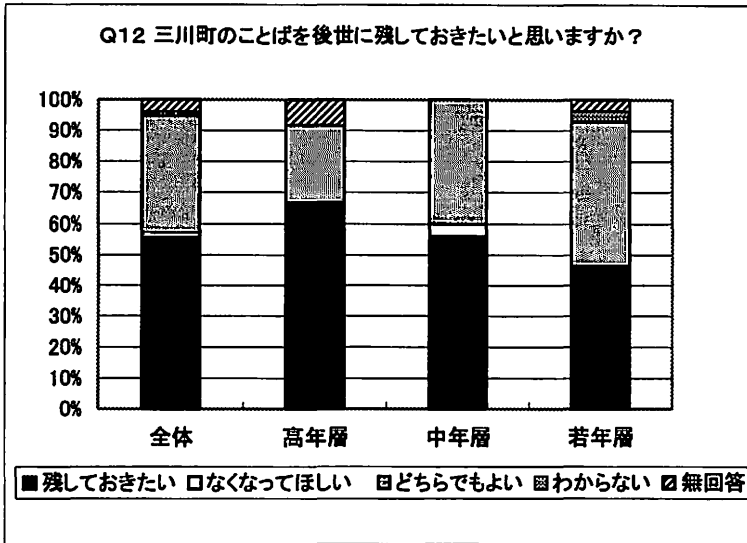
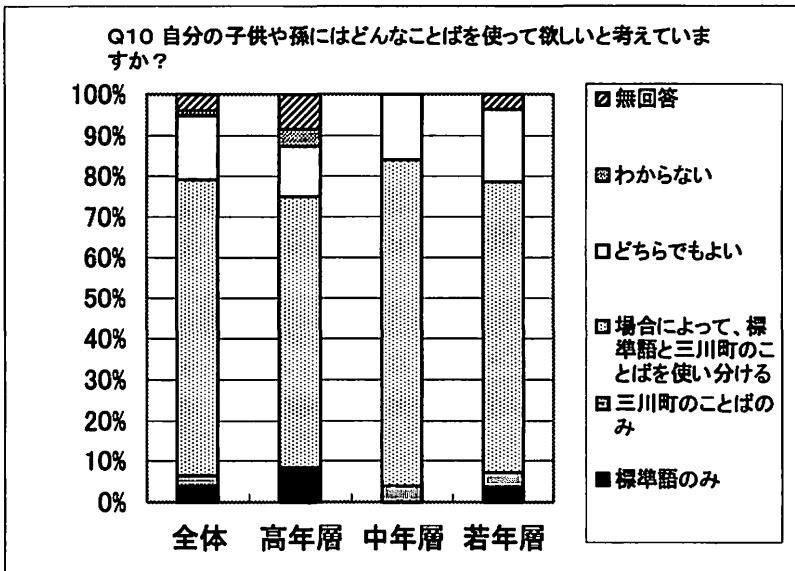


図9



しかし、その次の「今の三川町の若い人たちは方言が使えなくなっていると思いますか？」(図10)という項目においては、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した人はどの年代でも半数を超えている。この、「若い人」というのがどの年代を指すのかは個人差があるとは思いますが、少なくとも半数以上の人三川町のことばの変化を実感しているといえるであろう。そして、最後の「三川町のことばはこの先ど

うなると思いませんか？」(図 11) という項目についても、「そのまま残っていく」と回答した人が 30%程度なのに比べ、半数以上の人々が「だんだんなくなっていく」と回答している。これは、前の 2 問の結果と比べ、矛盾しているようなのである。三川町の人たちは、方言を残していこうという気持ちはあるが、やはり時代の変化に伴うことばの変化は止められないと考えているのだろうか。

図 10

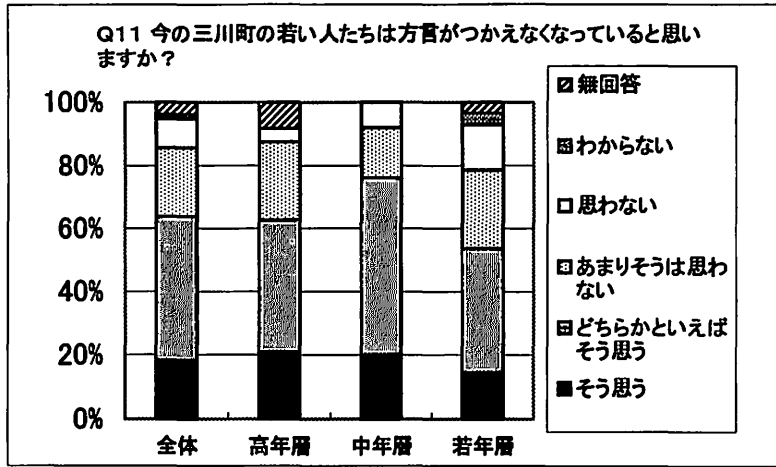
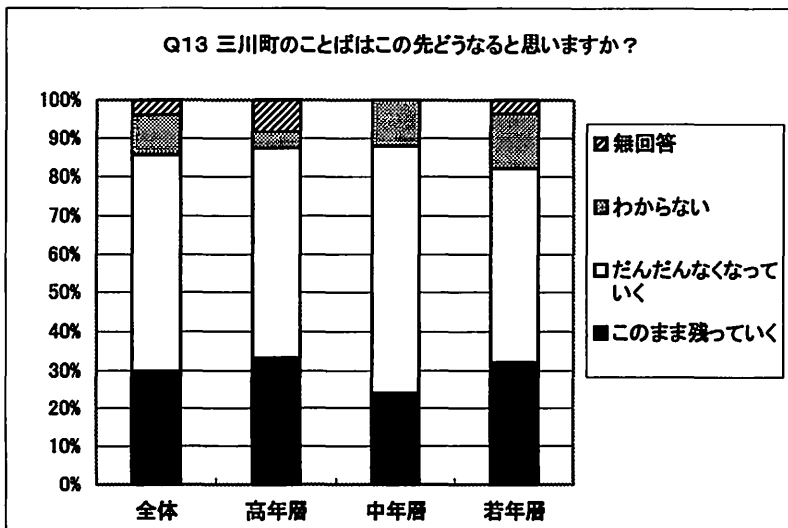


図 11



## 6. 三川町方言の行方

ここまでのアンケートの結果からいえる全体的な特徴は次のとおりである。

- ・ 三川町、三川町のことばに対する好感度が高い
- ・ 標準語をうまく話す自身のある人が少ない
- ・ 三川町のことばと標準語の使い分けは当然のことと考えている
- ・ 自分のことばや発音に三川町のことばの特徴があることを恥じる気持ちがない
- ・ 自分の子供や孫には、場合によって標準語と三川町のことばを使い分けて欲しいと考えている
- ・ 今の三川町の若い人たちは方言が使えなくなっていると感じている

### [高年層]

- ・ 三川町への愛着が強い
- ・ 標準語に対する好感度が高い
- ・ 標準語をうまく話す自信があまりなく、そのことは「仕方がない」ことだと考えている
- ・ 約 65%の人が方言を後世に残しておきたいと考えている

### [中年層]

- ・ 標準語をうまく話せないことをコンプレックスを感じる気持ち強い
- ・ 他の年層よりも標準語化を実感している
- ・ 約 55%の人が方言を後世に残しておきたいと考えている

### [若年層]

- ・ 標準語をうまく話せないことをコンプレックスを感じる気持ちはない
- ・ 方言を誇りに思う気持ちが少ない
- ・ 方言を笑われる機会が多く、そのことに不快感を感じている
- ・ 約 45%の人が方言を後世に残しておきたいと考えている

ここから、三川町の人々は町とことばを愛し、その伝統を次の世代にも受け継いでいって欲しいと思っはいるが、近年では他県への大学進学やメディアなどを通じて標準語に触れる機会が多く、時には方言コンプレックスを感じることもあること、そしてその機会がより多いと考えられる若い人ほど方言が使えなくなっている実態がわかった。では若い人はどのようなことばを使っているのか。若年層も標準語をうまく話す自身のある人が少ないことも考えると、今回の調査の結果から言えるのは、若い人が方言に変わって使用しているのは、方言でも標準語でもない中間的なものであると

いうところまでだろう (図3-1, 10参照)。その実態を探るのが今後の課題である。

### 注

図2は、本誌掲載の本木論文の調査結果を元に筆者が作成したものである。

本文および図中の「知的評価」「情的評価」「郷愁評価」の用語は、井上(1988)によるものである。図中の評価後の分類は、井上(1988)の分類を参考に筆者が行った。

### 参考文献

- 井上史雄 (1988) 「方言イメージの多変量解析」「方言のイメージ」『言葉づかい新風景』秋山書店
- 加藤和夫 (1995) 「隠れた方言コンプレックス」『月刊言語』<別冊>第24巻12号『変容する日本の方言』大修館書店
- 渡邊修平 (1995) 「札幌のことばは共通語と同じか」『月刊言語』<別冊>第24巻12号『変容する日本の方言』大修館書店

(たなべ なおこ・東京都立大学学生)